

## 55 【街の散策からの気づき発見】

江戸東京博物館から浅草駅へ隅田川テラス散策 v3

会員 K.T.

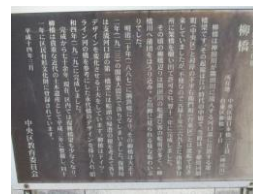
江戸東京博物館1F レストランに着き、Yさんと私が予約名簿に5名と記入する。しばらくしてNさん・Aさん・Kさん達 came。昼食をとりながら感想交換、「いやー良かった。」、「勉強になった。」、「広重のコーナーが、良かった。」、などなど、各々楽しんだようだ。昼食後、解散。帰路は、夫々の自由行動。Yさんと私は両国橋から浅草駅へ隅田川右岸の隅田川テラスを歩いて向かう散策コースにした。隅田川堤防につきあたると、隅田川テラス入り口の看板がある。階段を登って、下り、左岸テラスに降りる。総武線の陸橋を超え、下流の先に両国橋が見える。両国橋の前で階段を登り、堤防から対岸のテラスを見る。川があり迂回して降りることになるようだ。現代の両国橋は西岸の中央区東日本橋二丁目と墨田区両国一丁目を結ぶ国道14号線の道路橋になっている。江戸時代、隅田川を挟んで西側の武蔵国と東側の下総国の2つにまたがっていたことから「両国橋」の名称になったといわれる。位置は現在よりも下流だったらしい。橋の中ほどから隅田川をみると、観光船が走っていた。一時は「ドブ川」といわれた隅田川が、観光船や川沿いの散策を楽しむ場所になり、川の環境が維持されている。『すばらしいことだ。』と思う。橋を渡り、右岸に着いた。傍に川が流れ込んでおり、右岸テラスへは、対岸から見た川にかかっていた鉄鋼橋の迂回路をとる。迂回で渡った川は神田川、橋は柳橋だった。橋の傍に、文化財指定、江戸時代から続く、「柳橋」の由来説明碑があった。



両国橋



石塚稲荷神社



柳橋の由来



隅田川テラス/安藤広重



旧柳橋町名由来案内



右岸テラスから両国方面

「柳橋 所在地 中央区東日本橋二丁目・台東区柳橋一丁目(神田川) 柳橋は神田川が隅田川に流入する河口部に位置する第一橋梁です。その起源は江戸時代の中頃で、当時は下柳原同朋町(中央区)と対岸の下平右衛門町(台東区)とは渡船で往来していましたが、不便なので、元禄十年(1697)に南町奉行所に架橋を願い出て許可され、翌十一年に完成しました。(中略)明治二十年(1887)に鋼鉄橋となり、その柳橋は大正十二年(1923)の関東大震災で落ちてしまいました。復興局は(中略)、ドイツ・ライン河の橋を参考にした永代橋のデザインを取り入れ、昭和四年(1929)に完成しました。(後略) 中央区教育委員会」とある。

柳橋を渡ると、ビルの狭間に遺跡のように残っている神社があった。「石塚稲荷神社」とある。神社入口の左右に「柳橋料亭組合」・「柳橋藝妓組合」の玉垣が奉納されている。江戸時代から明治時代、柳橋は「一流の花街」として栄えた。「石塚稲荷神社」は、多くの料亭や芸子衆から火除けや商売繁盛の神社として信仰を集めていたようだ。「柳橋花街」は時代の流れの中で消えた。直進し角を右折すると、「隅田川テラス入口」の看板が見えた。登って、下り、右岸の隅田川テラスに着く。「高い堤防ですね。いろいろのある壁画があっていいですね。」と Y さんがいう。東京都東部(墨田区・江東区・江戸川区)は海拔0m地帯が広がっている。かつては洪水や高潮による水害が多発した地域で、隅田川テラスは昭和60年(1985)頃から始まった「スーパー堤防」整備事業の一環として整備されてきた。現在では北区岩淵水門から東京湾までの23.5kmの大部分が整備され、散策やジョギングなど、各々思い思いの憩いの場として使われている。総武線陸橋を超え、蔵前橋・厩橋と、川向こうのスカイツリーを見ながら、テラスを歩く、「やはり、東京は、いいですね。この付近は初めて歩きますが、いいです。」と Y さん、「もう少し先の対岸に通称『金のうんこ』と呼ばれるアサヒビルモジュールが見えるところが吾妻橋で、目的の浅草駅です。」と私。駒形橋を過ぎ、やがて吾妻橋に着いた。40分ほどの散策、『首都のおしゃれな風情と歴史があり、東京の散策は面白い。』と私も思う。